

令和 7 年度 府中市立本宿小学校学校経営計画

令和 7 年 4 月 1 日

校 長 藤咲 孝臣

(教育目標)

心身ともに健康で、知性と感性にとみ、自ら学ぶ実践力をもつグローバルに活躍する人間性豊かな児童「輝きのある子」の育成を目指す。

○ 自分の考えをもち、やりぬく子供

自ら主体的に考え、課題意識をもち、問題を粘り強く解決していく能力や態度を育成する。

○ 豊かな心をもち、仲良く助け合う子供

人権を尊重し、公共の精神を尊び、お互いを認め励まし合う温かな心や他人を思いやる心を育成する。

○ 健康安全に気を付け、体をきたえる子供

自他の生命を尊重し、自ら健康を保ち、体力づくりに取り組む態度と実践力を育成する。

1 目指す学校像

創立 56 年、55 周年を迎える本校のこれまでの歴史と伝統を受け継ぎながら、第三次府中市学校教育プランに掲げる「人権感覚と規範意識、社会的な資質・能力、確かな学力」の育成を目指し、本校の子どもたち一人一人を教職員全員で見守り育てていく。また、ふるさと府中に愛着と誇りをもち、世界で活躍できる府中っ子、グローバルな力をもつ「輝きのある子」の育成を目指す。

(目指す学校)

(1) 子供が第一の学校づくりをすすめる。→ 学校が楽しい、明日も来たくなる学校

◎本宿小の子供たち一人一人を教職員全員で見守り、励まし、育てる。

- ① 子供たちが落ち着いて安心して生活できる。心身ともに安心、安全な学校。
- ② 友達と学び合い、助け合い、切磋琢磨し合う。心の温かい学校。
- ③ 一人一人のよさや可能性を引き出す。失敗を恐れずチャレンジ。夢のもてる学校。
- ④ 子供たちの心身を鍛え、粘り強さとしなやかさを育む。たくましく自立を目指す学校。
- ⑤ グローバルに活躍できる力を育む。様々な人とのかかわりを大切にする学校。

(2) 教職員が、学び合い磨き合う学校づくりをすすめる。

◎「チーム本宿」として教職員も輝く学校

- ① 社会人、組織人、公務員、教員としての自覚と責任と誇りをもち。信頼される学校。
- ② 研修と修養に努め、常に自分自身の資質・能力の向上を図る。自己研鑽に勤める学校。
- ③ 持ち味を生かして学び合い高め合う集団。教職員も切磋琢磨する学校。

(3) 保護者・地域と協力・連携する学校づくりをすすめる。

◎地域とともに子供を育む学校

- ① 地域に広がる学校。(学校の教育活動を、家庭や地域に広げ、児童の実践力を高める。)
- ② 地域から学ぶ学校。(地域の人から学ぶ。歴史的・文化的施設や地域行事から学ぶ。)
- ③ 地域とつながる学校。(地域行事に参加する。地域活動に貢献する。施設を開放する。)

2 中期的目標と方策

「輝きのある子」の育成のために、児童に学習や行事を通して様々な経験をさせる中で、他者と良好な関係を築きながら協力して課題を解決する力、失敗を恐れず、自分の力を信じて挑戦し行動をしようとする力を育む。そして、仲間と学び合う中で、児童一人一人に粘り強さと自信を付けさせる。

○「自信」を付けるための要素は、

- ・チャレンジする心
 - ・成功体験と失敗経験
 - ・粘り強さ
 - ・自尊感情や自己肯定感
 - ・自己有用感
- である。

○チャレンジする心を育むために、

- ・自己理解
 - ・学びの場や機会
 - ・教師など指導者の支援や励まし
 - ・仲間からの励ましや応援
- が大切である。

○様々な集団の中で良好な人間関係づくりを学ぶために、

- ・毎年実施する学級編成
 - ・たてわり活動
 - ・異学年交流
 - ・学年内交流
- など、学級を超えた集団での学び合いを重視する。

○「自分にはたくさんの良さがある。」「自分は誰かのまたは何かの役に立っている。」ということを実感できる「学び合いのある」授業を推進し、様々な仲間とたくさんの経験をする中で、自分の良さを知りそれを生かそうとする前向きな態度、心情を育成する。

○コミュニケーションの力を付け、グローバルに活躍できる力を育む。また、相手の立場や思いを尊重し、いつでもどこでも誰とでも前向きに協力し、助け合い、課題解決していこうという勇気や使命感を育成する。

そのために、次の方策を実施する。

(1) 授業改善を推進するとともに、教師の指導力の向上を図る。

- ・児童にとって分かる授業、楽しい授業を行い、授業を通して教師との信頼関係を高める。そして、児童にとって学校が魅力のある楽しい場＝「明日も来たくなる学校」を実現する。
- ・府中市グランドデザインの4つの視点を全ての教育活動に明確に位置づけ、児童の主体的な学びの推進を図る。また、問題解決型の学習を全ての教科で実施し、本宿スタイルでの学習展開を常として、児童の主体的・対話的・協働的な学びを実現する。
- ・教科指導や学校行事において、多様な集団や場の中で学習に取り組ませることにより、児童が困難な問題に対して粘り強く挑戦しようとする意識の向上を図るとともに仲間と学び合い高め合うことの大切さを実感させる。そして、成功体験により自信をもたせる。また、失敗経験を振り返ることで、粘り強く頑張る姿勢、折れない心を育む。
- ・言語環境を整え、言語活動を充実させることにより、日本語のもつよさを実感させるとともに多様な表現力を身に付けさせ、読解力や文章表現力の育成につなげる。また、受信力や発信力を向上させて対話的な学びを広げ深め、主体的な学びを実現する。
- ・英語教育や国際理解教育を推進し、ゲストティーチャーや体験的な学びを通して外国語や異国の文化に興味や関心をもたせる。また、学習の成果を表現したり他者への発信を行ったりすることでコミュニケーションの力を育み、グローバルに活躍できる人材の育成につなげる。
- ・学年内で教科や単元内容で授業交換を実施し、学年で教材研究や指導法の工夫や改善を行い、授業力の向上や児童理解の深化と支援につなげる。

- ・ 学校内外の研修に積極的に参加することにより、教師一人一人が授業力や教師力を向上させるとともに自己の強みを確立させる。それにより専門性の高い教師を育成する。
- ・ 体罰や不適切な指導の禁止、個人情報保護など、教育公務員としてのサービスの遵守を教員一人一人が自覚し、サービス事故防止を徹底する。

(2) 豊かな心をもち、仲良く助け合う児童の育成

- ・ 集団としての規範意識や学習規律を大切にし、児童が落ち着いて生活できる学校、安心して楽しく学べる学校をつくる。
- ・ たてわり活動や異学年交流を授業や行事で多くもち、相手の立場や思いを意識し大切にした行動ができるようにする。
- ・ 多様な集団で学ぶ中で友達の「良さ」を認め合い、それが発揮されたときには温かく称賛しあえる仲間関係を構築する。同時に児童が自分の「良さ」を実感し、有用感を高め、自信につなげられるようにする。
- ・ 行事や学習などで児童一人一人に役割を与えて主体的に取り組ませ、事後の振り返りをさせることで、児童に自身の存在の大きさや大切さを実感させ、自己有用感を育み、自尊感情を高める。
- ・ 学年内で交換授業を日常的に行うことで学年として児童理解を深め、児童と教員との良好な関係を密にし、不登校やいじめの防止につなげる。
- ・ 専科教員を各学年の副担任として給食指導や学年行事などの支援などで関わる機会をつくることで良好な関係づくりを行い、チーム本宿として児童理解力の向上を図る。

(3) 体力の向上と心身の健康の向上を図る。

- ・ 体力向上委員会を中心に、昨年度の成果や課題を踏まえて児童の体力向上に向けて組織的・計画的に取り組む。
- ・ 休み時間の外遊びや学級遊びを推奨し、遊びを通して体力の向上を図る。
- ・ 運動週間や体育の学習の中で目標を明示して計画的に運動に取り組み、児童の体力の向上がはっきりと結果として表れるようにする。
- ・ 早寝・早起き・朝ごはんを実践し、正しい生活習慣を身に付けることにより、心身の健康につなげる。

(4) ICT 活用の充実を図る。

- ・ タブレット端末をはじめとした ICT 機器を効果的に活用して、全ての教科で記録・調査・表現・交流・学びの蓄積などねらいに応じて活用を工夫し、児童自身、教師と児童、児童同士の対話的な学びを実現し、多様な学び合いから学習を広げ深める。
- ・ 不登校傾向のある児童とのコミュニケーションツールとして活用し、学びを補うとともに関係づくりに役立てる。
- ・ タブレット端末を家庭学習でも活用し、主体的な学びにつながる機会を増やす。
- ・ 業務改善のツールとして ICT を積極的に活用し、業務の効率化を図る。

(5) コミュニティスクールの推進

- ・ 地域と共にある学校として、府中版コミュニティスクールを目指す。より一層学校を開き、保護者や地域の方々と協働する機会を設け、学校と家庭、地域が一体になった学校づくりを進める。
- ・ スクールコミュニティ協議会を地域や保護者との架け橋として、地域・保護者の声を

積極的に取り入れるとともに学校の教育活動を伝える機会とし、学校の教育活動への理解を高め、「地域とともに子供を育む」教育を推進する。

- ・ 学校と地域をつなぐ地域コーディネーターと連携し、府中2020レガシーに関わる「ふるさと学習」を推進する。地域や府中市のよさを実感させるとともに大切にし、誇りに思う児童を育成する。また、地域協力者や教育支援ボランティアの方々との連携を深める。
- ・ 学校便りや学校ホームページ、掲示物、PTA 活動や地域の会合などの場や機会で、積極的に本校の教育活動を地域・保護者に発信する。

(6) 小中連携及び幼保小の推進

- ・ 地域の学校として近隣小中学校との連携を密にし、児童生徒の学びや育ちの過程を踏まえ、9年間の成長を見通した継続的な教育を推進する。
- ・ 小中連携コーディネーターを中心に府中第三小学校と府中第四中学校との連携を充実させるとともに、児童の進学校として、府中第十中学校との連携も大切にする。
- ・ 本校へ幼児が入学する、幼稚園、保育園、保育所との連携に努め、小1プロブレムの解消に努める。

3 今年度の取り組みの目標と方策

(1) 教育活動の目標と方策

① 児童の学力の定着と向上を図る。

- ・ 学習や行事において、ねらいを明確にした指導計画を実践し、振り返りも重視する。また、指導計画に府中市グランドデザインの4つの視点「発見」「対話」「決定」「表現」を明確に位置づけ、主体的に学ぶ児童を育成につなげる。
- ・ 全教科で問題解決型の学習を実施し、毎時間のねらいを明確にして「本宿スタイル」による学習展開を行い、児童が主体的・協働的に学び、達成感を味わえる授業を行う。
- ・ 学習規律（「はい・立つ・です」）、持ち物、ノート指導等）を確立し、学びに向かう姿勢を重視して授業を実践することで学力の向上や定着に努める。
- ・ 言語環境を整え、言語活動の充実を図る。また読書活動を充実させ、語彙力や表現力を身に付けさせ、文章を読む力や文章を書く力、相手と話し合う力の育成につなげる。
- ・ 外国語専科教員による「外国語科」「外国語活動」の授業を充実させる。外国語科教員とALTと学級担任が連携を図り、英語力やコミュニケーション力の育成につなげる。
- ・ 加配教員と非常勤講師を活用して全学年で習熟度別算数少人数指導を実施し、児童一人一人の習熟状況や課題に応じたきめ細かな個別指導を実施する。算数科において基礎基本の定着や応用力の向上を図り、学力の積み重ねによる学力向上を実現する。
- ・ 教室以外の場所でも積極的にタブレット端末を活用する。学習の目的や児童の主体的な学びを実現するために対話や発信、調査、記録、表現など活用を工夫し、個別最適化の学びを実現する。また、学びの蓄積や振り返りにも役立て、学力向上につなげる。
- ・ 算数科や理科などで ICT 機器を活用したプログラミングの学習を実施して、児童の興味や関心を高める。また、プログラミング的思考につながる論理的思考力を育成する。
- ・ 家庭学習の必要性や取組の目安を学年に応じて児童と保護者に定期的に伝え、家庭学習の確実な取組を家庭に促す。家庭と連携して児童の学習面での苦手意識の改善と基

礎学力の向上を図る。また、自主学習を奨励し学ぶ意識や意欲の向上につなげる。

② 教師の資質能力の向上を図る。

- ・ 校内研究のテーマとして、「すすんで課題を発見し、解決に向かう児童の育成」を設定し、グランドデザインの4つの視点の授業における実現を目指す。特に「発見すること」を重点に置き、全教員で校内研究に年間を通して取り組み、授業力の向上を目指す。研究推進部が中心となり教員の指導力を組織的に向上させ、主体的に学ぶ児童の育成に努める。
- ・ 学年内で交換授業や学年学級を解体した授業などを、年間を通して行うことで、学年で教材研究や学年全体の児童理解を深めるとともに授業改善に役立てる。
- ・ 全主任教諭が年間1回以上若手教諭に授業を公開して指導を行う機会をつくる。また、主任教諭が校内ミニ研修の講師役となり、校内OJTを通して若手教員の教師力の向上につなげるとともに主任教諭自身の教師力を向上させる。
- ・ 自己申告面接時に、教員一人一人に今年度のミッションを伝え目標を設定させ、ビジョンを明確にもって職務に取り組ませ、キャリアの向上に目指させる。
- ・ 週の指導計画（週案）作成及び提出による教育課程の自己管理を指導する。週案簿を教員とのコミュニケーションツールの一つとして活用し、指導支援につなげる
- ・ 東京都教職員研修センター主催の研修や府教研、府中市研究協力校発表、その他の研究会や研修会に積極的に参加し、自己研鑽に励む。
- ・ ライフ・ワーク・バランスを意識した職務を全教職員が心がけ、ICTの積極的活用などによる業務改善や効率化を推進し、定時退勤を日常的に実現する。
- ・ 服務事故0を目指し、職員夕会などで日常的に注意喚起を行うとともに職員会議や校内年次研修、職層研修などで定期的に服務研修を実施して意識を高める。

③ いじめの防止と、安全安心に関わる指導の推進を図る。

- ・ 府中市いじめ防止対策推進条例及びいじめ防止対策基本方針に基づき、「本宿小学校いじめ防止対策委員会」が中心となり組織的に「いじめは決してしてはいけないこと」の指導を徹底する。また、保護者会や学校便りでも保護者に周知し、保護者や地域と連携していじめを生まない学校、いじめを許さない学校をつくる。
- ・ タブレット端末や副担任からの情報も活用して日常的な児童観察、児童理解に努め、SCも含め教職員全体で情報交換を密に行い、「あれっ？」と思ったら躊躇せず報告、連絡、相談させ、未然防止と早期発見に努める。
- ・ 年間3回の「いじめアンケート」を実施し、児童の実態把握に努め、早期対応を図る。また、担任による短時間の面談も実施し、未然防止や早期発見につなげる。
- ・ 全学年で每学期2回以上「いじめ防止の授業」を実施し、いじめ防止への児童の意識を高める。そのために専門家からの指導やSOSの出し方指導についても実施する。
- ・ いじめが発見されたら、すぐに「本宿小学校いじめ防止対策委員会」を開催し、組織的に対応策を検討、実施するとともに、児童、保護者への初期対応を確実に行う。
- ・ 専門家を招いていじめ予防の授業を実施する。また、道徳科や特別活動の中で計画的に人権尊重教育に取り組み、児童に正しい人権感覚を身につけさせ、多様性の理解や男女の平等、他者を尊重する態度を養う。
- ・ 最新の知識や情報を元に学校安全教育の推進を図る。実効性のある避難訓練の実施、

児童が主体的に取り組む防災・防犯教育を行い、児童の安全への意識を高めさせる。また、地域と連携した避難訓練の実施や地域の防災訓練への参加を呼び掛けるなど、地域と連携した防災体制を構築する。

- ・ 児童のアレルギー反応についての確実な情報提供を保護者に依頼する。全教職員で児童のアレルギーに関わる情報を共有し、食物アレルギー対応を確実に行う。また、買各学期はじめにアレルギー対応シミュレーション研修を全教職員で実施し、万が一に備える。
- ④ 不登校の防止に努めるとともに、不登校児童、家庭への対応を充実させ、不登校児童の再登校を図る。
 - ・ 担任や学年主任、管理職による不登校児童の保護者との面接や定期的な連絡の実施により、共通の目標をもち、協力して対応する。また、不登校児童の保護者を対象にした保護者会を実施することで保護者の不安感を軽減させるとともに学校の支援体制への理解を進める。
 - ・ 校内委員会など校内の組織を生かすとともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、みらいなど外部機関とも連携し、不登校の改善に努める。
 - ・ サポートルームのハード面とソフト面の充実を図り、不安を抱える児童が安心して過ごせる場所にし、教室復帰など次のステップにつなげる。
 - ・ 児童や保護者の希望をもとに、タブレット端末など ICT を活用して、不登校児童や保護者とのオンラインの情報交換や学習支援などを行い、個別最適化による学習の保障から不登校の改善につなげる。
- ⑤ 特別支援教育等、個別に配慮を必要とする児童への指導を充実させる。
 - ・ 特別支援教室担当教員や特別支援教室専門員との情報交換を密に行い、情報共有や児童・保護者対応などについて連携して対応する。特別支援教育コーディネーターを中心に校内委員会の定期開催を行い、不登校解消のために組織的な対応を行う。
 - ・ 連携型個別支援計画の作成と運用により、特別支援教室担当教員と学級担任が特別支援を要する児童に対してかかわりをさらに深め、協力体制のもとに児童の課題の改善を促していく。
 - ・ 保護者や関係機関（巡回相談チーム、民生児童委員、みらい、はばたき、児童相談所、スクールソーシャルワーカー）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、児童虐待・不登校を予防する。また、近隣小中学校や幼稚園、保育所との連携し、地域ぐるみで対応する。
- ⑥ 基本的な生活習慣を定着させるとともに、他者への優しさ、思いやりを育成する。
 - ・ 発達段階に応じて規範意識を高め、学校のきまり、マナーを定着させる指導を行う。
 - ・ 授業規律として、「はい・立つ・です」を各学年・学級で定着させる。
 - ・ 3つの「あ」（あいさつ、あんぜん、あとしまつ）を徹底と「ありがとう」「ごめんなさい」の言葉を大切にさせ、良好な人間関係の構築につなげる。
 - ・ 「いつでも・どこでも・誰とでも・自分から」あいさつができるよう、児童に働きかける。保護者や地域と連携してあいさつ運動を行い、あいさつを通して地域ぐるみで良好な人間関係をつくり、防犯や防災にもつなげる。
 - ・ 言語環境を整える。教師主導で正しい言葉遣いを身につけさせる。また、ふわふわ言

葉とちくちく言葉を理解させ、言葉には影響力があることを指導する。

- ・ 学校や地域での体験活動や奉仕活動を通して社会性を身に付け、学校の一員、社会の一員としての自覚を育む。また、働くことの意味や社会貢献の大切さを知らせる。
- ・ 武蔵台特別支援学校との副籍交流を計画的に実施し、他者理解や思いやりの心を育む。

⑦ 体力の向上と心身の健康維持を図る。

- ・ 体力向上委員会を中心に、体育朝会やなわとびや持久走などの運動週間を設定して運動にかかわる場を意図的に作り、すすんで運動に親しむ児童の育成に取り組む。
- ・ 体育授業の授業改善に取り組み、運動習慣と連動させ、運動量を確保する。各学年で、目標を設定し、意図的・計画的に体力向上を図る。振り返りも行う。
- ・ 休み時間の外遊びを奨励して、体力の向上につなげる。また、週1回の学級遊びを実施し、遊びを通して心身の健康につなげる。
- ・ 保健指導として、養護教諭が健康に関わる指導を実施し、児童が健康に関心をもち主体的に保持増進に努めるようにする。
- ・ 体力テストの結果を分析しマネジメントする。体力向上の方策を立て実行する。
- ・ 家庭と連携して「早寝・早起き・朝ごはん」など生活リズムを整えることを意識づけ、心身の健康につなげる。そして、気持ちよく登校できるようにする。

⑧ 未来へつなぐ府中2020レガシー教育の取り組みを充実させる。

- ・ 1学期に「世界とつながる英語 Enjoy Week」、2学期に「国際交流・国際理解 Week」、3学期に「日本語・日本文化 Week」を設定してレガシー教育に位置付け、コミュニケーション能力の育成を図り、グローバルに活躍できる人材の育成を目指す。
- ・ ICTを活用したオンライン交流など取組方法を工夫し直接交流を推進するなど、ウィーン市のヘルナルス区のハイルシュガッセ校との交流をさらに充実させる。異文化の理解や交流におけるコミュニケーションを通して、豊かな国際感覚を身に付けさせる。
- ・ 外国籍の児童や保護者から異文化を学ぶ機会をつくったり、留学生との交流の機会を設けたりする中で、児童に英語などを活用したコミュニケーションを実践させ、コミュニケーションの力の育成につなげる。
- ・ 社会福祉協議会など関係団体の協力のもとで手話やバリアフリーなどを体験的に学んだり、パラリンピックやデフリンピックなど障がい者スポーツを学んだりする機会をつくり、障害者理解や多様性の理解などの推進を図る。
- ・ 伝統文化や伝統工芸の分野で活躍される専門家から日本文化を学んだり、お囃子体験や熊野神社古墳の見学など地域の歴史や伝統を学んだりする機会を設け、地域と連携した体験学習である「ふるさと学習」を学年や学校全体で実践する。

⑨ コミュニティスクールの推進を図る。

- ・ 校内外の地域連携コーディネーターや民生児童委員などを中心に、地域の教育力を学校教育に取り入れ、児童の健全育成や家庭への支援につなげる。
- ・ お囃子体験や消防団体験などで地域団体をゲストティーチャーに招いて体験型の授業を実施し、地域の方とのつながりを深め、児童の地域への愛着と理解につなげる。
- ・ 農園活動指導者やボランティア、図書ボランティア、ヤギボランティアの方々など、教育支援ボランティアの力を教育活動に生かす。
- ・ 学校便りや学校HPで本校の教育活動を日常的に発信して理解を深めるとともに、地

域・保護者の声を積極的に取り入れ、連携を一層図っていく。

- ・ 学校公開、授業参観、保護者会、道徳授業地区公開講座、運動会、展覧会などの行事を通じて保護者や地域の方々からの本稿の教育活動への理解を推進する。
- ・ 保護者アンケートなど外部評価を教育活動に生かし、PDCAサイクルに則った取組を実践する。

⑨小中連携の推進

- ・ 年間3回の小中連携の日を充実させるために小中連携コーディネーターが中心となって準備を進め、学びと育ちの視点で授業参観や情報交換のための協議会を設定する。グランドデザインの4つの視点についての共通理解を図り、小中連携の中での授業実現を見据えた研修を進める。
- ・ 運動会ボランティアや部活動体験、発表会などでの合唱部や合唱団の交流など、児童生徒の直接的な交流の機会を充実させる。
- ・ 中学校教員の出張授業や小中教員の実技研修など、教員間の連携を深め、指導方法の工夫改善につなげる。

(2) 本年度の重点目標（数値目標）

- ① 学校が楽しいといえる児童90%以上
- ② 漢字・計算の定着率90%以上
- ③ 家庭で学習する習慣（学年×10分）が身に付いている児童80%以上
- ④ 友達に優しくしようと心がけている児童90%以上
- ⑤ すすんであいさつする児童90%
- ⑥ 外で元気に遊ぶ児童80%
- ⑦ 学校のきまりを守って生活する児童90%
- ⑧ 自分の安全を自分で守ろうと心がけている児童100%